咲いた華

ハイリスク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
咲いた華

【Ｎコード】
Ｎ１１９６Ｚ

【作者名】
ハイリスク

【あらすじ】
それはよくある夏の風景。
始まりは些細なことでした、
出会ったのは死神でした。
思い出したのは優しい記憶でした。
いきついたのは・・・・・
少女、九条　燐は屋上から飛び降り自殺したはずだった
しかし、目が覚めて彼女が見たものはあたり一面の白、
そして運命を変える死神だった。

頑張って書いてます、少しでも読んでもらえれば幸いです。

それはよくある夏の風景（前書き）

初です！

駄文ですが優しく見てやってください

それはよくある夏の風景

それはよくある夏の風景
夏休みに入った静かな、
静か過ぎる校舎の屋上と
グランド。
見下ろし、見下ろされる
少女
それはよくある夏の風景
耳鳴りのするほどの蝉の声が
やむことなく
響いていた

さよなら
さよなら
もうあうことも無いでしょう
前髪の隙間から見えた君に嗤(わら)って
言う
「さよなら」
さよなら

もうあうことも無いでしょう
さよなら
踏み出した足から浮遊感が来る
落下して行く私の体、身体、からだ、
君に近づいて行く
地面まであと5メートル
君と目があった
口許が弧を描く
ねえ、きみに最期に、言いたいことがあるんだ

「お、ま、え、の、せ、い、だ」

ああ君の顔が、かおが、カオガ歪んで行いく・・・

それはよくある夏の風景
悲鳴を上げた少女の声は
蝉の声と混ざり合い
青空によく響いていた

・・・・ざまあみろ

どこかで誰かが嗤(わら)っていた

嗤う漆黒

私は死んだ
今さっき、屋上から飛び降りて。
原因になった彼女の目の前で。
地面に身体が押し付けられる衝撃。
血が流れ出る生々しい感触。
すべて覚えている、すべて明確に、明瞭に、鮮明に、
なのに、なのに、どうして私は死んでない？

おかしい。
身体には傷ひとつ無い
周りはよくわからない白、白、白
困惑、混乱、
そんな感情に埋め尽くされていた私に急に後ろから声がかかった。

「なぁ、そこのお前、自殺者だろ？」
ぶしつけに声をかけてきた声は男特有の低い声だった
振り向いた私の目に映ったのは

黒。

驚くほどに真っ黒な髪、瞳をした、男だった。

「おい、自殺者かってきいてんだよ」
男は不機嫌そうに尋ねてきた
「・・・・たぶん、そうです」
私のあいまいな答えに顔を顰(しか)めながら男は言う

「たぶん、ねぇ、まあいい。俺は死神だ。名前はねぇ。」
「・・・しにがみ？」
「そう死神、でお前は間違いなく純度１００％自殺者で違いねえ」
なら聞くなよ、そう思った私は間違ってないと思う。
「それで、その死神が私に何か用ですか？」
「あ？・・・あぁ用ね、用。俺はなあお前と取引したいんだ」
「・・・・取引？」
怪しげな目をする私に男が言う
「そう、取引だ。簡単にいえば俺はお前の魂がほしい」
男が私の心臓あたりを指しながら言う
「タダとはいわねぇ。お前の魂もらう代わりにお前の寿命を対価にお前の願いを俺が叶えてやる」
・・・・・意味がわからないという顔をした私に男はさらに説明をしていく
「いいか？お前ら自殺者っつうのは本来の寿命をすっ飛ばして自分の命
を無理やり終わらせてんだ。
事故や病気とは違う。ありゃあ自分の寿命がきて死んでる。
おまえら自殺者の本来の寿命、・・・たとえばお前、お前は今こうして自殺して死んでなけりゃ
あと７０年いきてた
俺の言った寿命を対価にっつうのは、その７０年というお前の使われなかった命を対価にって言ういみだ。」
男はそこまで説明すると
私に手を差し出してきた
「なぁ、お前遣り残したことがあるだろ？」
やけに確信めいた口調で男が言う
「じゃなきゃ、こんな輪廻の輪の外れのはずれ、こんなところに居るはずがねえ」
男が言う

「俺の手をとれ、お前の寿命、活かしてやるぜ？」
そう言って不適に笑う男の手を

私は、・・・
私はその手をとった。

アカシックレコード（前書き）

感想などくれるとハイリスクは泣いて喜ぶので
よかったら
一言でも感想くれると嬉しいです

アカシックレコード

「さて、これにて俺とお前の取引は成立したわけだ」
男・・・死神はやけに芝居かかった口調で言った
「まあ、とりあえずお前に寿命を対価にって言うのがどういう意味なのかもう少し詳しく話す必要がある。」
今度はやけにまじめな顔で死神は私を見る。
私は静かにうなずいて説明を正した。
「いいか、おまえの寿命はこうしている間にも少しづつ減っている。」
意味がわからないという顔をする私に死神は「まあ、聞けって」そういって私をいさめてきた。
「俺の、死神の言う寿命っていうのはな、魂があり続けることができるギリギリまでの時間って言う意味なんだよ。」
「魂の、ギリギリの時間？」
「そう、ギリギリの時間、だ。本来はそのギリギリっつうのは人間が死ぬ時に同じタイミングでくるもんだ。普通に死んでったやつはそのまま魂の寿命が尽きてるから輪廻の輪に組み込まれてまた巡る。・・・お前、アカシックレコードって知ってるか？」
私は聞いたことの無い言葉に首を振る。
「・・・・アカシックレコード、そいつにはすべての人の歴史、全人類の歴史、宇宙の歴史その過去から未来までが克明に、鮮明に、絶対的に書かれている、絶対的な記録情報、それがアカシックレコードだ。」
壮大すぎる話に少し頭が追いつかず、私は死神の言葉を必死に頭で整理する。
「つまり、世界はそのアカシックレコードに記録されたとおりに進んでいるってことですよね？」
「そう、世界はアカシックレコードに記録された道をたどる、これ

は絶対的でけして狂うことの無い真理であり摂理だ。・・・だがな、たま～にこのアカシックレコードの絶対的な支配を無視して勝手に現世からバイバイしちまう奴がいるんだよ」
私はその言葉に肌があわ立つような、不快な感覚が背中に走って行くのを感じた。
彼は怪しげに私を見つめて笑う。
「そのバグみたいな存在がお前ら自殺者だよ。んで、死神はそのバグを正常に戻すのが仕事なわけ」
「正常に、戻、す？」
「そう、正常に戻す。今もお前は魂が終わりに近づいている。でもな、このまま魂が果てるのに後７０年・・・正確に言えば６９年と３６４日と１２時間ある。
ぶっちゃけそんな長い時間バグを野放しになんてできねぇ、最初は小さなバグでも時間がたてばどこに影響してくるか、わかったもんじゃねぇからな。
そこで登場するのが死神だ。死神は何十年っていう寿命を対価としてバグの願いを叶えてやることで魂を強制的に終わらせるんだ。
ここまでは、わかったか？」
正常にもどす、それの意味することが何なのか、私はカラカラに渇いた口で問う
「わかった、でも、正常に戻すって、具体的に・・・どう、するの？」
死神はいやらしくワラッタ。
「壊すんだよ跡形もなく圧倒的に破壊的に。そうするとな、アカシックレコードはあいた穴を埋めるために代わりを作る。お前という存在はすべてというすべてから消えるんだ。
お前がであった人、家族、いつか出会うはずだった友にも、彼氏やらにも、お前の代わりになったやつが出会い、物語を続かせるんだ。
ようは、必要なのはつじつまをあわせるための存在なんだよ」
私は呆然と死神を見やった

「なにほおけてんだ。自殺したんだから今も、過去も、未来も、もうお前のものじゃあないんだよ。当たり前だろ？おまえが要らないって言ったんだからよ」
「そんなことっ・・」
「反論なんてやめてくれよ？めんどくせぇ。
それより説明の続きだ。いいか？寿命を対価に願いを叶えるっつっても限界ってもんがある。たとえば死んだやつを生き返らせたり、たとえば誰かを殺したり、だな。
まあ、その辺考えて有効に寿命をつかえ。」
私は死神の言葉をただただ、聞いていた。

私は、私は別に世界から消えたかったわけじゃないんだ。ただ、あの場所に居たくなくて、でも誰にも見向き去れないのも寂しくて、だからあんな風に、あの子の、彼女の記憶にこびりつき、残るように、彼女の脳裏に死ぬまで焼け付くように、彼女に後悔を、彼女に最悪を、彼女に私の味わった地獄を理解、いや、痛感してもらうために、彼女を呼び出し、これ見よがしに自殺をした、・・・してやった。

始まりはきっとここだった（前書き）

カラオケに行きたい。

始まりはきっとここだった

始まりは些細なことだった
私、九条（くじょう）　燐（りん）は普通の中学生だった。
普通のどこにでもいる中学生、友達はほどほどにいて、親友も一人いて、両親の仲もまあまあ、そんな平凡な人間、それが九条　燐という人間だった。

夏、蝉の声がうるさい夏休み真っ只中のこと、わたしは親友の三上（みかみ）　牧（まき）に彼女の従兄弟のお兄さんの、相模（さがみ）　蓮（れん）さんの経営している喫茶店に連れて行かれた。
蓮さんは気さくな人で、私も牧も、本当のお兄さんのように慕っていた。
喫茶店につくと牧は私のほうをむいて、
「燐、誕生日おめでとう！」
と私に大きな花束を差し出しながら言ってきた。
その時私は牧が、明日の私の誕生日の前祝いをしてくれているということが、しばらく理解できないでいた。
少しして状況が飲み込めると、じわじわと嬉しいという気持ちがあふれてきた。
だらしなく顔が緩んだ。
牧と蓮さんは店の奥からケーキをとりだしてきて、私に差し出してきた。
少し形がくずれているのは、おそらく牧が何か失敗でもしたのだろう。
意地っ張りで不器用な彼女が私のために必死につくってくれたのだと思うと、私の顔はまただらしなく緩んできた。
ありがとう、ありがとう、と私は何度も言った
蓮さんが苦笑しながらおめでとう、と私の頭をなでてくれた。

しばらく騒ぎ倒して、時間が過ぎていって、帰る時間になり、私と牧は帰りの準備をしていた。
「燐ちゃん」
蓮さんが私の名前を呼びながら、小さな袋を私に差し出してきた。
中身は背中に天使の羽がついたクマのかわいらしいストラップで私はまた、ありがとうございます、ありがとうございますと何度も言った。
蓮さんは苦笑しながら
「ははっ、かわいいなぁ俺の妹は」
と私の頭をなでてきた。
蓮さんはわたしをからかったりするとき、私のことをよくふざけて妹、といってくるのだ。
「蓮さん、ふざけないでください！」
口でいいながらも蓮さんの手を頭から離さないのは、私自身彼を兄のよう思っているからだろう。
幸せだった。
当たり前の日常が。
幸せだった。
永遠に続く、そう信じて疑わなかった。
家に帰って、次の日に家族に祝われて、
幸せだった。
それは陽だまりの中でまどろむような、
暖かい海の底にしずんでいくような、
眩暈のするほど幸せな、シアワセな、しあわせな毎日だった。

一週間ほどして、夏休みが終わった。
毎年夏休みの残り一週間は一気に宿題をやるのが私たちの通例だったので、牧とあうのは一週間ぶりになる。
クラスの中で彼女の姿を見つけ、私は一目散に彼女の元へ向かった。
「牧っ」

私は牧に声をかけた。

牧は、――――――牧は私に一瞬だけ目を向けると、すぐに目をそらし、いつもは近づかない派手な格好をしたいわゆるギャルのような子達のもとへ行ってしまった。

その日、牧は一度もわたしの方へ来てくれなかった。私から近づこうとしても牧はそれとなく私を避けて、けっきょく一日中、会話すらすることすらなく学校は終わってしまった。

帰りに誘おうとしても、牧は今朝のギャルたちのほうへ行ってしまい、私を見てくれることはなかった。

次の日も、その次の日も、それは同じだった。

コレが私の非日常の始まりだった。

シアワセだった、

しあわせだった、

幸せだった。

何が、いけなかったんだろう？

ねぇ、牧・・・・・・・・・

なにが、どうして、なぜ、いったい、どうして、なぜ、なぜ、なにが、どうして、だって、だって・・・・わからないよ牧、わからないんだよ。牧牧牧牧牧まき、まきま・・・き・・・・・・まき！！

混乱、困惑、思いが混ざり、ぐちゃぐちゃになった感情の波にのまれていく・・・・・・

あぁ・・・どこかで

始まりのコールが聞こえた。

舞台はある中学校、

役者はそろった

幕は上がった

物語は終わりへ進む

坂に転がる石が止まらないように
物語は加速する
ゆっくり、ゆっくり
最期にむけて・・・・

歯車が狂い始めたのはいったいいつなのかな、ねぇ、牧。

答えの無い問いをわたしは繰り返して絶望した・・・

始まりはきっとここだった（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます！
感謝感激☆です！！

軋む歯車

牧が私を避けるようになってしばらくして、異変は起こった。
少しずつ、少しずつ、周りの人たちが牧と同じように私を避けるようになった。

始めは牧とあの時からつるんでいる派手な子達、次にそれを面白がって男子生徒の一部が、おとなしい子たちは巻き込まれたくないから、と私に近づいてくる人はいなくなった。

そしてその波はじわじわと広がり、学年全体に広がっていた。
そしてその波は立ちの悪いことにその威力をあげていった。
・・・・いじめだ。

ストレスのたまった中学生にはちょうどいい発散方法だったのだろう。
学年全体から無視されて、避けられている、助けるやつなんかいない。助けようなんて誰も思わない。
ていのいい玩具(おもちゃ)

はじめは足を踏まれたり、陰口をたたかれるくらいだったものが、日を重ねていく内に内容はどんどん過激になっていった。
歩けば必ず誰かにぶつかられ、教科書やノートは隠され、ボロボロになって帰ってくる。
私の悪口をいっぱい書いたノートをこれ見よがしに見せられたり、黒板に私のケータイのアドレスが書いてあって「私と遊んでね」と書かれていた時など泣きたくなった。

いじめの主格は牧とあの派手な子達のグループだった。

牧は私が何かされたり、言われたりする時、無表情で私を見つめていた。
まるで、「お前なんか最初から親友なんて思ってなかった。」
そう言われているようで、私は彼女の顔を見るたびに目の前が真っ暗になるような感覚に襲われていた。

・・・家族にはいじめなんて言えなかった。
いじめにあっている自分が恥ずかしくって、惨めで、もし知られたら父も母も私にきっと幻滅する、そう思った。
母も父も私のことを愛してくれると思う。でも、私の母は昔から完ぺき主義のきらいがあった。
たとえばテスト、私が始めて８０点台をとった時、母は眉を少ししかめた後、
「燐ちゃん、次はがんばりましょう。大丈夫よ、お母さんの子だもの、きっと出来るわよ」
そう笑顔で私に言うのだ。
たとえばピアノ、コンクールで私はぜんぜん賞が取れなかったのに、近所の子が特別賞を取ったという話を聞いた時、母は家で私に
「燐ちゃんなら次はきっともっといい演奏が出来るわよ。頑張りましょう」
そう少しひきつった笑顔で言った。
父はいつもそれを苦笑してみていた。
きっと母は私に過度な期待を、自分の理想を押し付けないように、自分なりに感情を抑えてくれていたのだと思う。だから私は今まで平気だった。
母の理想に完璧にそうことは出来ないことがあっても、それなりに頑張って、それなりにいい結果を出せば、母は
「さすがお母さんの子ね」
そう言ってわたしを褒めてくれた。

・・・・だからこそ、いじめ、なんて絶対言いたくない。今まで母の期待にギリギリで応えてきた。
いじめなんて母の理想からかけ離れすぎたこと言えばきっと幻滅される、見放される。
そうとしか思えなかった。

私はまだ中学生で、余裕なんて無くて、日々続いてく非日常が、日常になって何も出来ないまま現状を受け入れるしか出来ない子供(ガキ)だった。
何も出来ない。
そんな状態が一年ほど続いた時、自体は変化の時を迎えた。

それは夏休み前の
蝉が鳴き始めた、べたつく空気の日差しの強い日のこと・・・・

狂った歯車がキシッ、と嫌な音を立てたのがどこかで聞こえた。

気づいた理由（前書き）

しばらく受験で更新遅れます。

気づいた理由

その日も私の非日常は変わらなかった。
いつも通り、変わらない、もはや日常になってしまった非日常。

その日もわたしは学校が終わり次第、走って校門を目指した。
この場所に一秒たりともいたくなかった。
走って走って、ある程度学校から離れた時、わたしは声をかけられた。
「あれ？燐ちゃん？？」
振り向いた先にいたのは・・・牧の従兄弟のお兄さんで、私がつい一年前までは兄のように慕い、よく通っていた喫茶店のマスター、相模（さがみ）　蓮（れん）、その人だった。

「すっかり来てくれなくなっちゃってたから、心配してたんだよ？」
私は牧との中がおかしくなった一年前から、牧の従兄弟のお兄さんである蓮さんにもあいにくくなって、疎遠になってしまっていた。

そんな私を、心配、していた・・・・
その言葉に私は無性に泣きたくなった。いや泣いてしまっていた。
いきなり泣き出した私に、蓮さんは
「どっどうしたの？燐ちゃん？？なんかあった？？とりあえず、うちの店！！店行こう！ほらっ燐ちゃんのすきなチーズケーキだしたげるよ！！」
すごく慌てながら私を慰めようとしていた。
なんだか無性におかしくて、私は思わず笑ってしまった。
「おっ！笑った」
蓮さんは笑った私を見て、すごく安心したみたいに、嬉しそうに笑った。

その笑顔が眩しくて、心地よくて、私はまた笑った。
久しぶりに、笑った。

蓮さんは喫茶店につくとさっそくチーズケーキを出してくれた。
お礼を言って受け取った私の隣に蓮さんが座って、わたしの方を心配げに見た。

「ほんと、、急に来なくなったから心配してたんだよ？それに、なんか痩せたし、何かあったんじゃない？だいじょうぶ？」

どきりと、私の胸が鳴った。
「何にもありませんよ。ほんとに、何にも無いんですよ・・。」
私はただ同じ言葉を繰り返した。

蓮さんは少しまゆをしかめて、
「燐ちゃんが言いたくないなら、俺は無理には聞かない。でもね、燐ちゃん、すくなくともここに一人、燐ちゃんのことが大切で、心配してる人間がいる。
燐ちゃん、俺は何があっても君の見方だ。それは、覚えていてね。」

「・・・れん・・さ・・」
・・・・・あぁ
嬉しい、嬉しい、嬉しい
私のことを、こんな私のことを、こんなに思ってくれる人がいた。
うれしい、うれしい
優しい蓮さん、いつもお兄ちゃんみたいで大好きな人。
だからこそあなたには、あなただけには、迷惑をかけたくない。

私はまた泣き続けた。
喫茶店を出る時、蓮さんは私を心配して送ると言ってくれたけど、

また泣いてしまいそうだから、大丈夫だと断った。
帰り道、私はふと視線を感じた。
さすような視線、視線、視線
振り返るとそこには
そこには・・・牧がいた。
私のことをかつて、親愛の目で見ていた瞳は憎悪、嫌悪、負の感情に染まった目で私を見ていた。
私は悲鳴を飲み込みながら、
走った。
走って、走って走って、私は考える、どうして、なぜ・・・
そうして唐突に理解した。
あぁ、そうか牧は、あの優しい人が、あの温かい人が、蓮さんが、好きなのだ。
あのストラップの時も、今日も、思えばその前からずっと、彼女にとって蓮さんは特別だった。
そう特別だった。
親友の私をいじめることも厭(いと)わないほどに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1196z/

咲いた華

2011年12月17日09時56分発行